

大谷大学 自己点検・評価報告書  
2016年度

真宗学科  
仏教学科  
哲学科  
社会学科  
歴史学科  
文学科  
国際文化学科  
人文情報学科  
教育・心理学科

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
読む力・考える力・書く力の向上に向けた、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける指導の充実。	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰにおいては、親鸞の生涯と基本的な思想を学ぶ中で、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○様々なレポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。</li> <li>・5月、親鸞ゆかりの旧跡を訪ね、調べたことと訪れての感想をレポートにして提出させる。</li> <li>・5月、新入生歓迎講演会を実施する。感想をレポートにして提出させる。</li> <li>・後期、特別講演会を実施する。感想をレポートにして提出させる。</li> <li>・各クラス指導教員間で、レポートの内容を確認し、学生指導に活用する。</li> <li>○前期・後期の期末テストでは論述問題を中心に出题し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。</li> <li>○後期初めに、前期末テストの答案を返却し、前期の学びを振り返る機会にする。</li> <li>○適宜、授業時に小レポートを課し、添削の上返却し、次回授業時に振り返りの材料として活用する。</li> </ul> <p>演習Ⅱにおいては、法然の『選択本願念仏集』を読解することを通して、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○第1学年必修授業「専門の技法」(学科導入)において身につけた漢文読解能力を活用し、漢文テキストを読解していく。具体的には、『真宗聖教全書』をテキストに、法然著『選択本願念仏集』を素読し、書き下し文および現代語訳を作成しながら授業を進める。</li> <li>○漢文読解に必要な漢和辞典の活用法、仏教関係の辞書の活用法を随時、指導する。</li> <li>○前後期末のテストでは、論述問題を課し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。</li> <li>○レポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。</li> <li>・夏期休暇中に課題図書(真宗関係の書籍)を読み、後期初めの授業時にレポートを提出させる。指導教員はレポートを読み、コメントを付して学生に返却する。</li> <li>○比叡山フィールドワーク</li> </ul> <p>学習意欲の向上を願いとし、2012年度以降実施してきた比叡山登山フィールドワーク(法然・親鸞の足跡を巡る)は、その効果が認められるので、今年度も引き続いて実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前学習を行う。</li> <li>・登山後に感想レポートを課す。</li> <li>・4名の指導教員は感想レポートの提出状況を相互に確認し、登山・諸堂巡りや感想レポートを通して知り得た学生に関する情報を共有し、担当クラスだけではなく、第2学年の学生全体の指導に責任をもって当たるようにする。</li> </ul> <p>演習Ⅲにおいては、以下の取り組みを実施する。</p>	

○卒業論文提出までの2年間を見通して、学生が各自の課題に基づいて学びを進められるように指導をする。

- ・第2学年までの学習経過を把握するために、演習Ⅰ・Ⅱ担当教員とゼミ指導教員との連絡会を行う。
- ・第3学年の当初に、今後の取り組みについて面談指導を実施する。
- ・オフィスアワーやゼミ懇談会を利用して、学生の状況を把握するように努める。
- ・以上の内容については、学科会議において、学科全体で共有する。

○ゼミにおける発表・討論を基本として、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。

- ・前期中にゼミに関わるテーマから課題を取り上げ、レポートを作成し提出させる。
- ・夏期休暇中には、課題図書を設定し、レポートを作成。
- ・後期中にゼミに関わるテーマから課題を取り上げ、レポートを作成し提出させる。
- ・春期休暇中には、各自の研究課題に基づいて、レポートを作成。卒業論文に向けての課題を明確にする。
- ・上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

## 2. 【2016年度の達成状況報告】

### 演習Ⅰについて

○行動計画は全クラス共通して全て実施できた。各行事の詳細は以下の通り。

- ・新入生歓迎講演会の実施について

日時：5月17日（火）13:00~14:30（1200教室）

講師：井上尚実氏（大谷大学教授）

講題：「真宗の学び」

- ・特別講演会について

日時：11月29日（火）14:40~16:10 真宗学科3コースについての講演会（K204）

講師：一楽真氏（大谷大学教授）、木越康氏（大谷大学教授）、井上尚実氏（大谷大学教授）

\*加来雄之学科主任の挨拶後、上記3名より真宗学科3コースについての講演会を実施した。

\*なお、「行動計画」においては、「感想をレポートにして提出させる」としたが、コースに関わる特別講演会としたため、レポート提出ではなく、「コース希望届」（希望コースと希望理由を書く）の作成と提出という内容になった。

### 演習Ⅱについて

○行動計画は全クラス共通しておおむね実施できた。比叡山フィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）の詳細は以下の通り。

- ・比叡山フィールドワークについて

10月29日（土）9時00分大学集合、大型バス2台で北山通と白川通の交差点まで移動、その後雲母坂から比叡山を登り、延暦寺境内の諸堂を巡った後、午後2時に現地解散。

○演習Ⅰ・演習Ⅱとも、レポートの内容については4名の指導教員が他クラスのものも共有し、学生指導に活用できた。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

### 演習Ⅲについて

○行動計画は各ゼミ共通しておおむね実施できた。各ゼミから提出された達成状況報告書を根拠資料として添付する。【根拠資料】7

## 3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

演習Ⅰ・演習Ⅱとも、文章能力の向上を意識して様々なレポート課題や期末テストにおける論述問題を課したが、学生の文章能力が向上していることが教員間で確認できた。また、授業時の小レポートを次回授業時にフィードバックしたり、前期末テストの答案を添削の上、返却したりすることによって、学びを振り返る機会を与えることができた。演習Ⅲでは様々な機会のレポート課題を通して学生の文章表現能力の向上を確認することができた。

各クラスの指導教員間で、学生の状況を共有することができた。【根拠資料】1～3

第1学年の特別講演会として、今年度は、第2学年以降のコース選択に向けた各コースについての講演会を実施した。また、講演を踏まえて学生にコース希望届を提出させ、学生と指導教員による個人面談を実施した。複数回の面談を実施したクラスもある。学生にとっては第2学年以降の学びを具体的にイメージし学習計画をたてる機会になるとともに、教員にとっても学生の問題関心や考えを理解する貴重な機会となった。【根拠資料】6

第2学年の比叡山登山とフィールドワークは、終了後の学生のレポートによれば、初めて比叡山に登った者も多く、親鸞の足跡を自らたどることを通して、その生涯と思想について主体的・共感的に考える機会となっている。また一緒に山道を歩く中で学生と教員、学生同士の距離が縮まり、より細やかな指導のための関係作りに役立っている。【根拠資料】4

第2学年の学生に対しては、昨年度に続き夏期休暇中に課題（読書感想文）を課した。学生のレポートからは、現代において親鸞思想を学ぶことの意義が確かめられているように思われた。第1学年での学びを再確認し、継続していく上で効果があったと思われる。【根拠資料】5

第3学年については、各ゼミとも学生一人一人と面談を実施し、各自の課題関心に応じて細やかな指導を行っている。卒業論文を意識したレポート課題も課しており、次年度の卒業論文の作成にむけて、着実に学習が進んでいると思われる。各ゼミの自己評価については上記達成状況報告と同様に、根拠資料中に提示する。【根拠資料】7

#### [改善すべき事項]

- ・第2学年に課した夏期休暇中の課題について、提出されたレポートを添削して返却したクラスとそうでないクラスとがあった。後期初めの指導について、教員間で確認する必要がある。
- ・第3学年については取り組むべき課題についてはすべてのゼミがA以上の評価である。一方、効果が上がったかなど達成度についてはB評価が多いことから、この差異が、設定された課題の内容にもとづくものか、課題の実施方法にもとづくものかを検証する必要がある。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1. 学生レポート① 演習Ⅰ「六角堂の説明」（親鸞の旧跡を訪れてのレポート）
2. 学生レポート② 演習Ⅰ「新入生歓迎講演会の感想」
3. 学生レポート③ 演習Ⅱ「比叡山フィールドワークの感想」
4. 「比叡山フィールドワーク行程表」
5. 「第2学年 夏期休暇 課題について」
6. 「特別講演会」資料
7. 演習Ⅲ「達成状況報告書」

## <自己点検・評価委員会使用欄>

### <所見>

レポート課題を学生の読む・考える・書く力の向上だけでなく、学生指導の材料として教員間で情報共有されているのは評価できる。演習Ⅰ・Ⅱではレポートが返却され、教員によるフィードバックが学生の学習意欲を高めていると思われる。ただし、演習Ⅰ・Ⅱでは「感想」レポートが中心であり、単に「楽しかった」「面白かった」の内容にとどまる可能性がある（根拠資料の学生レポートはよく書かれた内容の一例であると思われるが、それでも「驚いた」「感じた」などの表現が見られた）。特に、演習Ⅱでの比叡山フィールドワークは、学科独自の課外活動であるので、感想を自由に書かせるのもよいが、見学および報告すべきポイントなどを的確に示し、論理的に自分の意見を記述させる学習機会とするのが望ましい。また、文章表現能力が向上したということであるが、具体的な変化の内容についての説明をしていただきたい。

<自己評定> S	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
第1学年から第2学年への移行時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014年度より開始した本取り組みは、その効果が見られるので、今年度も、第1学年から第2学年への接続や展開のために、第1学年の「学習計画レポート」を踏まえて第2学年冒頭での面談指導を年度初めに実施する。</p> <p>○第1学年の春休みに、3つの課題（①一年間の学びを振り返る。②学びにおける疑問や課題を整理する。③これからの学習計画を記す。）の「学習計画レポート」（1,000字以上）を課す。</p> <p>○レポートは、第2学年初めのクラス別懇談会時にクラス指導教員に提出する。</p> <p>○指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施する。面談指導に際しては、必要に応じて第1学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がける。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画は、全クラス共通して全て実施できた。</p> <p>・春期休暇中のレポート課題を学年初めのオリエンテーションにおいて提出。その内容をもとに個人面談を行い、きめ細やかな履修指導、学生指導を行った。</p> <p>上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>学生の課題レポートの内容によると、レポートの作成は、学生自身にとってこれまでの学習を振り返ると共に今後の学習を考える好機となっている。また、そのレポートを踏まえての面談による履修指導は、指導教員にとって学生の実情や関心を把握する良い機会であり、同時に学生と教員との関係作りのきっかけとなり、その後の指導に有効なものとなっている。</p>	
[改善すべき事項]	
特になし。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
<p>1. 春期休暇課題指示のプリント（学生による書き込みあり）</p> <p>2. 課題レポート</p>	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

&lt;所見&gt;

前年度からの継続的な実施内容であるので仕方のない面もあるが、報告内容が前年度とほとんど変わ

りがない。教員側の指導体制は同じであっても、学生の顔ぶれは変わっているので、「2016年度」の学生の動向が読み取れるような成果内容を具体的に報告していただきたい。また、前年度の所見でも指摘のあった「きめ細やかな履修指導」の内容を明らかにしていただきたい。これにより、他学科が参照すべき事例にもなると思われる。

<自己評定> S	<委員会評定> S
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
第2学年後半の指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014年度より開始した本取り組みは、その効果が見られるので、引き続き今年度も学生が学科および大学における学びを体系的にイメージできるように履修指導をする。</p> <p>○上記の趣旨に則り、第2学年の後半に、第2学年から第3学年に向けての面談指導を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第3学年以降の履修に関する指導を、第2学年年度初めの面談指導やその際に使用した「学習計画レポート」も踏まえながら、実施する。</li> <li>・教員は学生の学習状況を把握する機会とし、学生には入学後の学びを振り返らせる機会とする。</li> <li>・第3学年でのゼミ決定や、可能ならば卒論も視野に入れて面談を行なう。</li> <li>・第3学年からのゼミに関する情報を提示する。</li> <li>・ゼミ担当教員のオフィスアワーを積極的に利用して、相談に行くように促す。</li> <li>・第3学年編入の学生の指導については、学年初めのオリエンテーションにおける「指導教員決定及びゼミ懇談会」の際、編入生を対象とした説明の機会を設ける。そのことを通して、ゼミ決定やゼミでの学習に戸惑うことがないように配慮した指導を行う。</li> </ul> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画は、全クラス共通して全て実施できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人面談では指導教員が学生の学習状況を把握し、これまでの学びを振り返ることを促し、更にゼミ決定について情報提供や相談にのるなど、きめ細かい指導を行った。</li> <li>・また年度初めのゼミ決定のオリエンテーションの際、ゼミ決定等に戸惑うことがないよう、編入生を対象として説明の機会を設けた。</li> </ul> <p>上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
指導教員にとっては学生の学習状況を把握し、丁寧な学習指導を行う貴重な機会となっている。	
[改善すべき事項]	
特になし。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
ゼミ決定のための配布資料	



**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

第3学年でのゼミ選択でミスマッチのないよう、入念な面談指導が行われていることが窺える。4年間の中間点で、これまでの学びと今後の専門的な学びについて教員とともに考えることは、中だるみになりがちな時期の学生にとっても意義のあることと思われる。2014年度の実施から数年が経過し、この面談指導を通じた学生側の変化や進展が何か認められるものと思われるので、それらについても【点検・評価】に記載していただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
2016年度開設・新コースに関わる取り組み	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>新コース開設を受けて、以下の取り組みを実施する（思想探究・現代臨床・国際、2016年度新入生より適用）。</p> <p>○教育課程の整備について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習Ⅱの授業内容を確定する。各コースに共通して教授する学びの内容と、各コースにおける独自の学習内容を定める。</li> <li>・演習Ⅱの内容を踏まえ、演習Ⅲ、演習Ⅳの授業内容について検討を加える。</li> </ul> <p>○コース選択に至るまでの指導体制の確立</p> <p>下記の内容を実施することを通して、コース選択までの指導体制を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1学年時に、各コースの趣旨やカリキュラム、また想定される卒業後の進路について学生に周知する。</li> <li>・各コースの学びに関わる特別講演会を開催する。</li> <li>・第1学年の終わりに志望コースと志望理由を記した書面を提出させる。それをもとに指導教員が面談を実施し、志望理由を確認し、必要に応じて適切な助言を行う。指導教員間による協議の上、コースを決定する。</li> <li>・コース開設の初年度であるので、課題点を抽出し、次年度に向けた指導体制の充実をはかる。</li> <li>・上記の内容を、会議において学科全体にも周知する。</li> </ul>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画は、全て実施できた。</p> <p>○教育課程の整備について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習Ⅱについては、コースごとにシラバスを作成した。どのコースも『歎異抄』を基本テキストとして真宗の学びを深めていくが、その中で各コースの特色を活かすことができるように、独自の学習内容を定めた。</li> <li>・演習Ⅲ、演習Ⅳの授業内容については、小委員会を開き、引き続き検討中である。</li> </ul> <p>○指導体制の確立について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コースの決定にあたっては、行動計画の通り、指導教員が学生一人一人と関わりながら丁寧に指導を行った。詳細は以下の通りである。</li> <li>・普段の演習Ⅰの授業時に、各コースの学びの特色などを説明し、学生にコース選択の意識づけをさせた。</li> <li>・11月29日（火）4限目に特別講演会を実施し、3人の教員がコースの学びに関わる講演をそれぞれ行った。</li> </ul>	

<ul style="list-style-type: none"> <li>・コース希望届（第1希望コース、第2希望コース及びそれぞれの希望理由）の提出を求め、その書面をもとに指導教員が面談を実施した。学生の状況に応じて、複数回面談を実施した（12月～1月中旬）。</li> <li>・指導教員間で協議をし、学生の課題・関心や適正などを考慮しコースを決定、学生に周知した（1月下旬）。</li> </ul>
<b>3. 【点検・評価】</b>
[効果が上がっている事項]
コースの選択を通して、自分の課題を尋ねる学生の姿勢を早くから涵養できた。
[改善すべき事項]
決定したコースに対し、不満を持つ学生がいた。指導教員が再度面談を行い対応したが、このような場合の対応策を教員間で共有していなかったため、次年度の課題としたい。
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2017年度真宗学演習Ⅱのシラバス</li> <li>2. 真宗学科コース希望届</li> </ol>

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>新コース開設の初年度でもあり、コース決定に至る指導は、第1学年を通じて丁寧に行われていることが窺える。[効果が上がっている事項]にも記載のように、コース選択を通じて、学生自身の課題への気づきを早い段階から促すことができたものと思われる。今年度からは演習Ⅱも始まり、各コースの特色がより鮮明になると思われるので、その点もコース選択時の指導に反映していただきたい。一方で、学生の特性を考慮した上でコース決定されたものの、その結果に不満をもつ学生がいた点については、その原因（学生個人に起因するものか、選考過程上の問題か、など）を十分に検証していただきたい。</p>

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
演習 I-IV で日本語表現能力を向上させる方策を検討・実施する	
[達成基準]	
演習 I-IV において、学生が口頭で発表し、互いにディスカッションを行い、レポートを書く能力を向上させる。	
[行動計画]	
<p>1. 演習 I-IV で、どのような形で学生の日本語表現能力（口頭発表能力、ディスカッション能力、文書表現能力など）を伸ばす工夫がなされているかを、学科内で共有する。</p> <p>2. 情報共有をしたうえで、どのようにして学生の日本語表現能力をさらに向上させるかを検討し、実施する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>1の「共有」については定期的な昼食会などによってほぼ達成できた。</p> <p>2の「検討」については、第1学年の「日本語表現」の受講指導などは実施したが、追跡して成果を確認することまではできなかった。第4学年の演習を卒業論文指導に特化したゼミ内容に改変したが、未提出者が新学年で4名、留年者で3名あり、数字的には良い結果ではない。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学科教員間の問題意識の共有は進んでいる。</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年に応じた具体的な目標の設定が不可欠である。</li> </ul>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

## &lt;所見&gt;

演習 I～IV において日本語能力を向上させる取り組みの必要性と実施内容について学科教員内の共有が図られたことは取り組みを充実させる上で効果が期待できる。今後、具体的な方策について早急に検討すると共に学年に応じた目標設定が必要ではないか。また、卒業論文に特化したIVゼミでは卒業論文作成に向けた学生の意識改革と指導の継続が必要である。以上の点から評価はBとした。

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
志願者増に向けての広報活動の強化	
[達成基準]	
入学定員を満たすこと	
[行動計画]	
<p>1. 入学センターとより緊密に連絡を取り、高校生が進路を決定する以前の早い時期に、仏教学科全教員により高校訪問を実施する。その際には「高校生のための仏教講座」と映画上映会のチラシを持参し、仏教学科のPRに役立てる。</p> <p>2. 宗門・宗門外の寺院子弟を学科へ導くための方策を検討する。</p> <p>3. 「高校生のための仏教講座」（仏教学会主催）と映画上映会を継続して実施する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>1の「高校訪問」は予定24校中18校実施した。時期が年末にずれ込んだために都合のつかない教員が出てしまった。</p> <p>2は実行できなかった。</p> <p>3はいずれも実施したが、十分準備した上での実行とは言い難い。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「高校訪問」によって、大谷大学に対する外部の客観評価を知ることができる。</li> <li>・高校訪問時に学科の企画を持参・説明することは、最初の話題としては適切である。</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・諸般の点で、もっと早期に準備すべきである。</li> <li>・2については実施のための方策を早急に考えなければならない。</li> </ul>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

## &lt;所見&gt;

高校訪問により客観的な外部評価が得られた点は成果である。高校生のための仏教講座、映画上映会等は事前準備を確実に実施し、より充実した取り組みになるよう一層の努力が必要である。また、寺院子弟を学科に導くための方策については入学センターとの連携のもと、継続して考える必要がある。以上の点から評価はBとした。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
新3コースに対応した教育・研究体制の確立	
[達成基準]	
1. 卒業論文指導を中心とした演習Ⅳを構築する。	
[行動計画]	
1. 演習Ⅳの担当者の試行錯誤の結果を学科全体で共有し、論文指導中心の演習Ⅳを実現する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的な昼食会の実施などを通して課題の共有はできた。</li> <li>・卒業論文梗概発表会を実施した。</li> <li>・未提出者が新学年で4名、留年者で3名あり、内容的に充分とは言えない。</li> </ul>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・梗概発表会は毎年実施しているが、出席者の割合が例年より格段に向上した。</li> <li>・卒業論文作成に特化した演習Ⅳに改変したので、ゼミによく出席した学生は比較的良い論文を完成させた。</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題はゼミに出席しない、あるいはできない学生であり、家庭の問題など学科の努力を超える点もある。従って、一人一人の学生の実態を深く理解する必要がある。</li> <li>・少人数ゼミも限度を超えると逆に授業がしにくい点がある。</li> </ul>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
卒業論文指導中心の演習Ⅳが実現し、出席率の高い学生は優良な論文の作成に至った点及び、梗概発表会では出席率が格段に上がった点は目標基準に達したものと考えられる。論文の未提出者や留年学生に対しては、学生の実態把握に基づく指導を継続し、演習Ⅳの活動の一層の充実を図る必要がある。以上の点から評価はAとした。

＜自己評定＞ A	＜委員会評定＞ A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
真宗学科と連携したカリキュラムの構築	
[達成基準]	
2018年度学部改編に向けて、真宗学科と共有する新しいコースを複数設定し、真宗学科とより密接に連携したカリキュラムを構築する。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新コースの数と名称を確定する。</li> <li>2. 新コースの理念と目的を決定する。</li> <li>3. 新コースの具体的カリキュラムを構築する。</li> </ol> 以上の3点は、すべて真宗学科の教員と協議したうえで行う。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
・学部改編に伴う課題であり、前期中に集中的に議論を重ね、9月中に一通り報告したので目標は達成された。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 真宗学科教員と合同で検討会を実施したことにより、両学科で共有できる点と現状では共有できない点とが明らかになった。</li> <li>・ 今後、共有できない点をどのようにして埋めて行くのか、課題が明確になったとも言える。</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

**＜自己点検・評価委員会使用欄＞**

## ＜所見＞

学部再編に伴い、カリキュラムの構築に向けて2学科で集中的に議論がなされ、新コースのカリキュラムの構成に至った点が評価できる。しかし、「両学科で共有できる点と現状では共有できない点とが明らかになった。」と評価されていることから継続的に議論を行い、より充実した連携カリキュラムの構築に向けて検討を進めることが必要である。以上の点から評価はAとした。

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
(1) 1年次における客観的に読む力、わかりやすく書く力の養成 (2) 2年次における専門的な文章および英語の文献の読み方の基礎の養成	
[達成基準]	
(1) 1年次修了の学生が、新書で使用される程度の日本語で書かれた哲学的な文章を読むことができる。また、論理的な文章で他者を説得することができる。 (2) 2年次修了の学生が、(3年次以降の学びに必要な基礎的能力として) 文庫で使用される程度の日本語で書かれた専門的な哲学文献を読むことができる。また、(ヨーロッパ語の基礎となる) 英語で書かれた基礎的な哲学文献を読むことができる。	
[行動計画]	
(A) 「哲学科演習Ⅰ」において、テキストやディスカッションから理解した内容を数回(前期2回、後期1回)、小レポート等によって文章化させて添削する。また、学期末の定期試験もレポート形式で実施する。 (B) 「哲学科演習Ⅱ」において、コース内容を概観するような日本語哲学文献、英語文献を講読する。 (C) (A) と (B) を達成するためには、そもそも学生が学びの場に居合わせる必要があるが、従来からの哲学科の傾向として不登校型の学生が多いことから、「哲学科演習Ⅰ」「哲学科演習Ⅱ」において学修に困難を抱える学生を発見し、生活・学修指導を行う。また必要に応じて、指導教員による指導に加えて、保護者や学生相談室との連絡も密にし、多面的な指導を行う。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画(A)は、「哲学科演習Ⅰ」各クラスにおいて数回のレポートを課し、ほぼ毎回の授業においてディスカッションを課したことから実施できた。行動計画(B)も、「哲学科演習Ⅱ」各クラスで各コースでの学びに関係する英語文献の講読を1年ないし半年にわたって課したことからほぼ実施できたと考えている。</p> <p>行動計画(C)は、ある程度授業に参加できる、あるいは学校に来ることのできる不登校傾向の学生については「哲学科演習Ⅰ」と「哲学科演習Ⅱ」各クラスで個別の指導を行い、別課題を課す等の対策を講じた。授業にほとんど出席できない学生には、保護者に連絡して面談(二者面談、三者面談)をする等の対策を講じた(なお、「全国父母兄弟懇談会」での面談の機会は、この作業の一貫として哲学科の全教員が利用した)。この結果、今年度の1年次から2年次への留年率は昨年度から大幅に減少したので、計画を達成できたと考えている。(2017/03/15 追記)</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
(C) に関して、1年生の留年率	
[改善すべき事項]	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
(A) (B) とともに、コースを越えて全クラスの状況を総覧できる成績評価一覧、GPA 資料があれば	



資料となるが、現時点では存在しない。したがって資料は、①2016 年度哲学科シラバス（「哲学科演習Ⅰ」Ⅰ-1～4a とⅠ-1～4b、「哲学科演習Ⅱ」Ⅱ-1ab を参考資料として添付する）、②授業内でのレポート内容、ディスカッションにおける発言といった授業中の参加態度についての各教員の印象、および③、②について例年と比較しつつ行った学科会議での検討、となる。

(C)については「2016 年度文学部（1→2）判定者数一覧」（2017/03/15 追記）

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

##### <所見>

目標達成を判断する根拠資料がないため、担当者へのヒアリングから推定すると、目標は、ほぼ例年通り、ないしはそれ以上の達成がなされたようである。1年次の留年状況が大きく改善されている理由には、学生の学力向上も一因かと推測される。目標を評価する客観的な指標がないので、この点については、困難ではあるがなんらかの工夫が望まれる。なお、1年生の留年率の改善は、目標番号②の「初年次における定着率の改善」と内容が重複するので、結果だけのみでよいと思われる。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
(1) 初年次における定着率の改善	
[達成基準]	
(1) 2016年度の1年次から2年次進級の際の留年率を、2015年度より少なくする。	
[行動計画]	
<p>(A) 授業時の講読、ディスカッション、レポート等から学生の学修面での問題の有無を把握する。</p> <p>(B) 「哲学科演習Ⅰ」の前期担当者は、できるだけ早い時期(4月・5月)に全学生と個人面談を行い、学習・生活面での問題を把握する。</p> <p>(C) 「哲学科演習Ⅰ」授業時において学修に困難を抱える学生を発見し、生活・学修指導を行う。また必要に応じて、保護者や学生相談室との連絡を密にし、多面的な指導を行う。</p> <p>(D) 可能であれば、入学前教育(の特に「自習プログラム」)におけるアンケートや課題提出状況を確認し、大学での学びに不安を抱えている学生や、課題提出状況に問題のある学生を把握し、「哲学科演習Ⅰ」の授業や個人面談の際に活用する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画(A)については、ある程度授業に参加できる、「哲学科演習Ⅰ」の授業時に実施した。また、教室での授業に参加しにくい学生には指導教員が別課題を課す等の対策を講じた。行動計画(B)については、「哲学科演習Ⅰ」(前期)4クラスに在籍する新1年次学生全員(44名)に個人面談を実施し、行動計画(C)については、計画通りの多面的な指導を行った。以上の結果、今年度の1年次から2年次への留年率は昨年度から大幅に減少した。</p> <p>行動計画(D)については、入学前教育(「自習プログラム」)におけるアンケートや課題提出状況を入学センターから2月に入手した。そこには課題の提出が恒常的に遅れる傾向のある生徒や、入学後の学修に不安をもつ生徒のデータが記されている。これを全教員で共有し、3月10日に実施した入学前教育(学科スクーリング)における個別面談の際の参考資料にした。また、同資料を入学後の指導においても参考指導として「哲学科演習Ⅰ」の授業時に活用する予定である。(2017/03/15 追記)</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
1年生の留年率	
[改善すべき事項]	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
「2016年度文学部(1→2)判定者数一覧」	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

きめ細かな学生への対応により、留年率が減少したのは、大きな成果である。しかし、理想は留年率0%なので、さらに学生対応の工夫と指導の徹底を期待したい。また、今回は特に新入生と卒業生への対応が喫緊の課題であったようであるが、今後、2年次から3年次、および留年率が文学部の他の学科に比べ高い3年次から4年次への進級についても対応が望まれる。

<自己評定> A	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
(1) 卒業年次の留年率の改善、卒業論文提出率の改善	
[達成基準]	
(1) 2016年度の卒業年次の留年率を、2015年度よりさらに少なくする。	
[行動計画]	
(A) 1年次から4年次にいたる各学期の指導において、常に4年次後半の卒業論文提出を最終目標として意識させ、卒業論文提出にいたるスケジュール内での自らの立ち位置の自覚を促すようにする。	
(B) 「哲学科演習Ⅲ」「哲学科演習Ⅳ」各クラスにおいて卒業論文テーマの明確化・文章化を教室や個人研究室にて積極的に指導することに加えて、指導の際に、学生が卒業論文作成に限らず広く学修面での問題を抱えていないかを確認する。	
(C) 学修面で問題のある学生には、保護者や学生相談室との連絡を密にし、多面的な指導を行う。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
行動計画 (A) (B) (C) を実施した。この結果、哲学科の4年生の留年率は——2012年度から2014年度までは増加傾向にあったが2015年度に大幅に減少し——、さらに2016年度は2015年度よりもわずかであるが改善した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
4年生の留年率	
[改善すべき事項]	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
「2016年度（後期）文学部卒業・修了判定数一覧」	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
2012年度から2014年度まで増加傾向の留年率は、2015年に減少に転じ2016年度は、ほぼ横ばいの状態で、コンマ以下を無視すれば2016年度は、2015年度と同じ留年率である。現状維持から脱却し、さらに留年率を下げるにはどのような手立てが考えられるかを、1年次の留年率は劇的と言ってよいほど下がっている（目標番号①）こともふまえて、最終学年に至るまでの過程を通して、さらに検討することが望まれる。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標] 演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ：社会文化事象について考察し、その成果を表現する力の育成	
第1学年では、社会文化事象とそれに関する文献他の情報に関心を持ち、積極的に接する態度、客観的にそれらを理解し、考察する力を養う。第2学年では、選択した学問の視点と方法の基礎を、文献講読等によって理解し、基本概念と具体的な事象を突き合わせて考える態度と力を養う。同時に現代社会の諸事象への幅広い関心と視野を持てるようにする。第3学年では、個々の研究課題を定め、深く探究することの面白さと方法を学び、自らそれを実践しつつ、成果をゼミ仲間と共有し、高めあう態度と力を養う。	
[達成基準]	
第1学年では、新書レベルの文献やプリントを読む機会を多く設ける。達成基準はクラスの全員が、授業に積極的に取り組み、課題資料の内容を基本的に理解し、自分と関係づけて考える態度をもって考察表現し、そこからさらに情報収集することの必要性への認識を持つこと。 第2学年の基準は、授業で意欲的に文献に取り組み、基本概念を活用した考察と表現ができること。 第3学年の基準は、ゼミでの発表交流を重ねたうえで、学年終盤時点で、選択学問分野の視点と方法を踏まえて、自らの研究課題が一定に定まり、それに沿った資料収集などが開始されていること。	
[行動計画]	
各学年各クラスをなるべく20人を超えない数で構成し、日常の演習において、個々の学生の態度・理解度・志向を把握しながら演習運営をおこなう。 文献講読の機会を授業内に設ける他、授業外での取り組みを喚起する。発表、小レポート、期末レポート等、考察過程や成果を文章表現し、各自が自らの営みを客観的に把握し評価できる機会を設ける。現代のさまざまな社会文化事象について関心を喚起する機会を、講演会やフィールドワークなどの形で設け、それらへの参加を各演習クラスで促す。学外の実践家を複数招き、「犯罪と社会」「貧困家族の学習支援」「ストリートチルドレンのケア」「市民運動と法制定」などをテーマ候補に、講演会を企画し、第1～3学年の演習に組み込むかたちで、履修生聴講の機会を作る予定。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
おおむね達成することができた。 第1学年では、総合演習と学びの発見および専門の技法との連携を通して、積極的な授業参加の態度を育み、課題の理解を促し、社会学的な関心の喚起をすることができた。第2学年では、受講者が社会学・地域政策学・社会福祉学の基本概念を習得し、それを活用して口頭発表、レポートの作成をすることができた。第3学年では、それぞれの学問の視点から関心ある研究課題を絞り込み、資料収集や文献分析を行い、それを口頭発表およびレポート作成につなげることができた。 第1学年から第3学年まで、学生は調査やボランティア活動、学外からのゲストの講演への参加を通して、積極的に社会的問題に関心を持ち、学外の人々や活動と関わるすることができた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
社会問題にかかわり実践的な活動をしているゲストを招き、公開講演あるいは授業のゲストスピーカ	

一という形で話をしてもらい、その後質疑応答をすることで、学生が社会問題をより身近な問題として捉え、研究の中でその問題をさらに追求するべく、関心を喚起することができた。

主たるゲスト

### 公開講演会

**松下照美さん**（ケニアのストリートチルドレンのケア）安倍首相夫人も訪問した施設を運営。なお人文情報学科の協力のもと動画を作成。アフリカにおける貧困と子どもたちの状況について学んだ。

**岡本昌之さん**（京都拘置所長）再犯防止のための矯正施設の中での教育プログラムや就労支援について学んだ。

**佐保輝之さん ひかるさん夫妻** 冤罪の被害者である夫妻から、冤罪を引き起こす現行の取り調べや裁判制度の問題点、母親が認知症ということに気づけなかったことから起きた様々な問題について学んだ。

### 個別の授業

当事者である**倉田めばさん**（大阪ダルク施設長）の話を通してジェンダー、性的少数者について理解を深めた。

民族的少数者としての在日コリアン、その歴史的背景や社会の中での位置づけ、ヘイトスピーチなどについて**高敬一**（大阪国際理解教育センター）さんの話を通して理解を深めた。

大阪で貧困問題に取り組んでいる司法書士の**徳武聡子**さんに貧困やその子どもへの影響、奨学金が返済できない場合の問題解決方法などについて話してもらった。社会福祉の授業（個別）との合同の形で行った。主にパワポのプレゼンテーションの形をとり、根拠資料は特になし。

### [改善すべき事項]

- ・1クラス20人をこえるクラスもあり、少数の授業なら、より一人ひとり、講読、文献分析、レポート作成のきめ細かい指導をすることができる。理想は10人前後であろう。
- ・授業参加に積極性を見せない受講生の授業参加をどう促すか、この2つが残された課題である。

### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- 目標①-1／公開講演会（松下照美氏）
- 目標①-2／公開講演会（岡本昌之氏）
- 目標①-3／公開講演会（佐保輝之氏）
- 目標①-4／個別授業（倉田めば氏）
- 目標①-5／個別の授業（高敬一氏）

### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

社会の中で実践的な活動をしている学外講師による公開講演会や授業内での講演を企画することにより、社会文化事象に対する学生の関心を喚起しようとする試みとともに、第1学年から第3学年へと、社会学の基本概念や方法論に基づいた分析と考察の仕方を段階的・発展的に習得させ、口頭及びレポートによる表現力の育成へとつなげていくという学科の取り組みは高く評価できる。一クラスの人数が多い状況の中での指導の困難さはあると思うが、今後も継続的に取り組んでいただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
「就職力」の向上（以下、引き続き前年度と同様）	
[達成基準]	
仕事や就職に対する関心を、「知る」、「調べる」、「体験する」など具体的行動へ結びつけることのできる学生を増やす。	
[行動計画]	
NPO 法人あったかサポートによる講演会及び演習を実施する。特に就職活動を始める第3学年の参加を呼び掛ける。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
ほぼ達成できた。あったかサポート（根拠資料）の講演に加え、個別の第3学年の授業で、就活を終えた第4学年を招き、就活では何をしたか、何に焦点をおき活動をすすめれば良いのかを話してもらった。なお社会学科の2月時点での内定率は92%で、ほぼ全国平均並みである。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO あったかサポート理事杉原純子（社会保険労務士）さんの講演を通し、労働（アルバイトを含め）における基本的人権、求職におけるブラック企業の見分け方を学ぶことができた。事例を通して労働環境の様々な問題を理解することができた。事前にアルバイトについてのアンケートを学生に実施し、それに基づき、個々の事例を取り上げながら話を進めた。この講演を通し、労働にまつわるトラブルを自分と関係したものと理解し、労働への関心を呼び起こすことができた。</li> <li>・第4学年に就活経験を話してもらうことで、第3学年後半から始まる就職活動では何をすれば良いのかを、あらかじめ描くことができ、就活を「ビクビクしなくても良いもの」と捉えるようになった。（第3学年の最後の授業で、懇談会の形で行ったので、特に根拠資料はない）</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
「4回生の就活の話」をより早い時期（例えば、9月頃）にしたほうが、効果的であったとも考えられる。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
目標②／あったかサポート講演会資料	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

## &lt;所見&gt;

事前にアルバイトについてのアンケートを行った上で、労働法規や労働環境に関わる様々なトラブルの事例についての講演会を実施することで、身近な問題としての労働に対する学生たちの関心を高め、さらに、第4学年の就活体験から具体的な手順を学ぶことで「就職力」を高めようとする学科の試みは、高く評価できる。さらに高い内定率を目指して今後も継続的に取り組んでいただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
社会に貢献できる生き方を実践する力をつけるためのアクティブ・ラーニング、PBL (Project Based Learning) 型授業の実施	
[達成基準]	
アクティブ・ラーニング、PBL のプログラムに向けた授業を各学年で実施し、適宜報告書としてまとめる。	
[行動計画]	
地域連携室（コミュ・ラボ）と密に連携をとり、社会学科 PBL としてさまざまな取り組みを行う。地域政策学コース第 2 学年「NPO ラーニング基礎」「社会学演習Ⅱ」履修学生が主たる対象となる。現代社会学コース「フィールドワーク」における調査演習、第 3 学年の社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップ並びに実習など各学年においても開拓的プログラムを実施する。これら正課授業に加えて、ボランティア活動への積極的参加、学生による地域の社会福祉施設へのヒアリング調査などを実施することで、社会への貢献や社会参加などの実践力を身につけるためのプログラムについて検討する。なお、実施した内容についての成果は報告書としてまとめる。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>ほぼ達成することができた。</p> <p>フィールドワークや祇園祭ごみゼロ大作戦、中川における調査、コミュニティラジオの放送を通し、その対象の（地域の）人々と積極的に関わり、地域の問題に気づき、その気づきをもとにさらに聞き取りを重ねることができた。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアや学外での調査に参加するという自己決定をもとに、自ら選び、社会活動や社会での調査に参加するという積極的学びを促すことができた。それに基づき、アンケートや聞き取り、人々との関わり方のスキルを磨くことができた。</li> <li>・フィールドワークでは、自ら課題を設定し、それをもとに学内及び学外で調査を行い、資料を収集することを通して、積極的な学びへの態度を育成することができた。その成果として報告書を完成させることができた。「アクティブ・ラーニング授業報告第 5 回 2016 年度学科科目実践研究 『フィールドワーク』 成果集」は 3 月中旬に刊行が完了した。</li> <li>・中川での調査についても、報告書「中川の暮らし再発見」を完成することができた。3 月に刊行が完了した。</li> <li>・祇園祭ごみゼロ大作戦では、コアスタッフとして事前の研修や打ち合わせを重ねたうえで、他の大学の学生や社会人と交流し、それをもとに環境問題や社会活動への参加の意義を理解することができた。その成果について、来年度参加することが期待できる学生を対象に報告することもできた。報告会は 6 月 12 日になされた。</li> <li>・コミュニティラジオ番組放送</li> </ul>	



<p>5月22日（木）より毎週、地域政策学コースの学生が「NPOラーニング基礎Ⅱ」の授業の一環で、京都市北区に拠点を置くNPO法人コミュニティラジオ京都と連携し、毎週50分間のラジオ番組「大谷大学Happy hour!」の制作、運営に取り組んだ。学生は5名ずつ3グループに分かれ、週替りで番組の運営を担当（パーソナリティ、ディレクター、タイムキーパー、ミキサー）。5月22日から開始し、計45回放送した。毎週、北区で仕事や地域活動に取り組む方をゲストに招きお話を聞く他、大学行事のインフォメーション等を行った。</p> <p>成果として、番組づくりを通じて企画力やマネジメント力の向上、チームワークの強化や、ゲストとのトークを通じたコミュニケーションスキルの獲得等、学生の成長に大きく寄与した。またゲスト出演者を中心に地域との関係づくりも進展した（ラジオ放送については、根拠資料は特にない）。</p>
<p>[改善すべき事項]</p> <p>学外でのフィールドワークに、より多くの学生に関心を持ってもらうことが必要と思われる。フィールドワークではアンケートだけでなく、聞き取りや観察をもう少し取り入れれば、人との関わりの中で社会的問題を発掘することに繋がるであろう。</p>
<p><b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b></p> <p>目標③-1／コミュラボ特設サイト「祇園祭ごみゼロ大作戦」</p> <p>目標③-2／アクティブ・ラーニング授業報告第5回 2016年度学科科目実践研究「フィールドワーク」成果集</p> <p>目標③-3／報告書「中川の暮らし再発見」</p>

<p><b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b></p>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>フィールドワーク、中川学区プロジェクト、祇園祭ごみゼロ大作戦、コミュニティラジオ番組放送などを学生自らが自己決定して選び、積極的に参加していく中で、社会への貢献や社会参加の仕方を学び実践力を身につけていくというアクティブ・ラーニングとPBL型授業の試みが成果を上げていることは添付された様々な根拠資料からも明らかであり、高く評価できる。今後も内容のさらなる充実を目指して、継続的・発展的に取り組んでいただきたい。</p>

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>演習Ⅰでは、学生が歴史への関心を深めつつ、世界史的な広い視野を養うとともに、日本を含む東アジアの歴史を専門に学んでいくための基礎知識の修得と、史料読解の基礎力を身につけることをめざす。また、学生が自己の問題意識の深まりを確認し、自分の言葉で表現するよう、文章能力の向上をはかる。</p>	
<p>演習Ⅱでは、学生が主体的に選択した自己のコースにおいて、専門的な知識を修得していくとともに、専門書・学術論文など参考文献の精読と内容の把握、及び資史料の収集・整理・分析を通じて、自分なりの歴史像を構築していくための基礎的な作法や手段を身につけ、あわせてその成果を、歴史用語を的確に用いて記述できるよう文章能力の向上をはかる。</p>	
[達成基準]	
<p>学生が入学時にもっている歴史に対する知識と関心は、範囲が狭く、かつ限られた角度からのものであることが多い。演習Ⅰを通じて、幅広く基礎知識を修得するとともに、歴史事象を世界史的な関連の中で把握することを通じて、広い視野と多角的な関心を身につける。また、初歩的な史料読解をおこない、史料の重要性を理解する。</p>	
<p>演習Ⅱでは、演習Ⅰで身につけた広い視野と基礎知識を踏まえて、さらに各コースにおける専門的な知識を修得するとともに、参考文献の内容把握と史料の読解をもとに自己のテーマについて考察をおこない、その内容を的確にレジュメにまとめて発表できるようになる。また、発表の内容に、発表時の質疑応答により得られた知見を加えて、的確な言葉を用いてレポートを執筆できるようになる。</p>	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰでは、プリントを使用して日本史・世界史の基礎事項と漢文訓読の基礎を修得させる。その際、単に事項を説明するだけではなく、事項相互の関連や時代像の把握についての理解が進むように工夫する。また、文章力の向上をはかり、歴史についての関心の深まりを実感する機会として、ある程度の間隔を置いて振り返りレポートを課す。</p>	
<p>演習Ⅱでは、学生がレジュメを作成する際、必要に応じて事前指導を行なう。また、授業時にコメントを付すとともに、状況に応じてレジュメを訂補する作業を課す。そのほか、振り返りレポートまたは中間レポートを課すとともに、定期試験のレポートについても添削指導を行なう。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>演習Ⅰでは、昨年度と同様本年度も、日本史・東洋史（半年ずつ担当）とも担当教員が作成したプリントを使用して授業を行い、基礎的な知識の修得をはかった。受講生にはプリントの課題内容を予習して授業に臨むように指示しており、基礎知識と史料読解の基礎力の修得という目標をかなり達成できたと考える。漢文訓読の習熟は2年生時以降の専門的な研究の基礎となる重要な課題であるが、これについても定期試験での得点等の状況から見て、相当な効果を上げることができた。振り返りレポートについては、クラスにより実施状況に差はあったが、ほぼ毎回実施、あるいは少なくとも半年間に数回は実施しており、受講生自身はもとより、担当教員による受講生の修学状況の確認という点でも大きな成果を上げている。ただ、時間的な制約が大きく、今年度においてもいずれのクラスでも個</p>	

別にレポートの添削指導をするまでには至っていない。

演習Ⅱでは、すべてのゼミにおいて各専門分野の中から受講生各自がテーマを選び、あらかじめレジュメを作成して授業時に発表している形式の授業を展開している。発表前に個別にレジュメの原案を提出させて事前指導をしているゼミがあるほか、事前提出を義務化していないゼミでも、受講生が自発的に原案を持参して指導教員の指導を仰ぐ場合が多い。また、どのゼミでも発表時にレジュメに対してコメントを付与しており、この点では目標を達成できている。振り返りレポートについては、いくつかのゼミで中間レポートを提出させている。期末のレポートに対しては、ほぼすべてのゼミで添削をし、返却している。

### 3. 【点検・評価】

#### [効果が上がっている事項]

演習Ⅰでの授業内容は、昨年度と同様に、日本史・東洋史の基礎知識の修得という点で、非常に大きな効果を上げていることを実感している。高等学校で日本史、世界史を履修していなかった受講生から肯定的な感想が多かったことはもちろん、これらの科目を履修していた者からも、「高校での授業内容から一歩進んだ、歴史の流れを大きくつかむ形での授業展開がなされ、学ぶ点が大変多かった」といった感想が多く寄せられた。

演習Ⅱでは、レジュメの作成と発表について、年間を通じて数度にわたり繰り返して行った結果、受講生のほぼ全員が修得するに至っており、大きな効果を上げている。また、文章表現についても、他の授業等でも重視していることもあってか、以前よりも適確な表現がなされてきていることが確かに感じられる。

史料の読解力、文章表現力ともに、本年度の卒業論文の内容からは、上述の学科としてのこれまでの地道な取り組みの成果が徐々に現れてきていることを実感している。

#### [改善すべき事項]

演習Ⅰでは、振り返りレポートを、限られた時間をいかに有効に活用して実施するか、また実施したレポートをどのようにして「次」に活かしていくか（たとえ添削して返却したとしても、受講生が添削内容を咀嚼しなければ、活かされたとは言えない）が、昨年度同様、課題である。

また演習Ⅱでは、レジュメに対するコメントの付与、レポートの添削などは実施されているが、演習Ⅰと同様、それをどのようにして「次」に活かし、受講生の力量を高めていくかが課題である。

### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

①-1 「日本の歴史（概観）」（演習Ⅰ日本史プリント）

①-2 演習Ⅰ東洋史プリント

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

##### <所見>

演習Ⅰ、Ⅱの取り組みの内容とその点検・評価から、達成基準に掲げられている内容は、ほぼ達成できていると判断できる。今回点検・評価の結果、認識された〔改善すべき事項〕に記されている課題を含め、学科における教育の充実化を更にすすめていただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>卒業論文執筆に向けての個別指導の推進。</p> <p>「ゼミ」を大学での学びの要（かなめ）と位置づけ、発表や討議、レポートの執筆を通じて、学生一人一人が、自己の関心にもとづいて課題を設定し、参考文献と史・資料を読み解いて課題を検討し、その内容を的確に表現する能力を身につける。</p>	
[達成基準]	
行動計画をすべて実施したことをもって、達成とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう、履修指導を徹底する。具体的には、各ゼミにおいて各自のテーマに対応した講義・実践研究を例示し、その受講を確認する。</li> <li>2 オフィスアワーの活用のほか、全ゼミ生を対象に、個人面談方式による個々の学生に合わせた指導を行なう。前期・後期それぞれ少なくとも1回ずつの個人面談を実施する。</li> <li>3 レジюмеやレポート作成について個別指導を実施するとともに、レジюмеへのコメントの付与、レポート添削などの事後指導を行なう。</li> <li>4 長期休暇中に課題を課すことにより、「ゼミ」の取り組みへの関心を持続させる。</li> <li>5 心身の不調で大学に来られない学生について、学生支援課や保健室・学生相談室などと連携して対応を検討していく。</li> </ol>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>昨年度に比して卒業論文の提出率も上昇し、卒業延期者も減る見通しで、①の項目に記した点も含めて、学科としての取り組みの成果が着実に実を結びつつあることを感じている。講義・実践研究の履修指導も、本年度は各ゼミで行うよう学科会議等で数度にわたり促した。教員各自もその必要性を痛感しており、ほぼすべてのゼミで行うことができた。個人面談は多くのゼミで実施されており、教員と学生との距離を縮め、一人一人の問題関心を掘り下げる上で効果を上げている。ただ、これは学科全体の深刻な問題であるが、教員一人あたりの指導学生数が多く、特に受講生数が非常に多いゼミでは、個人面談を行うのは例年のことではあるが時間的に無理な状況にある。この点に関しては、何らかの形での改善が必要であることを痛感している。レジюмеやレポートについての、作成の指導、コメントの付与、添削指導などは、どのゼミでも実施している。また、長期休暇中のレポートについては、昨年同様、全体の約8割のゼミで課した。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>授業でのテーマ発表を軸としたレジюме作成とコメント付与、レポートの添削指導などは、どのゼミでも実施しており、授業に出席している学生は、ほぼ全員が卒業論文の完成ができている。学術的にかかなり水準の高いものも少なくなく、特に優秀とみなされるものについては、例年通り、学科編集の学術誌『大谷大学史学論究』に卒業論文抄録として掲載した。</p>	

#### [改善すべき事項]

行動計画の1に掲げた、「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう履修指導を徹底する、という点については、昨年度より履修指導を行うゼミも増え、効果も上がっているが、未だに全ゼミで行われるには至っていないので、徹底すべく一層の努力を傾注していきたい。

また、レジュメやレポートの指導は、総体では効果を上げていると考えるが、これも例年同様、何度も同じ点を指摘しなければならない（つまり、前回の指導が身についていない）学生も依然として少なくない。こうした学生は、近年の状況から見ても決して減る傾向にはなく、その指導には特に注意を要することを実感している。一層の工夫をすべく努めたい。

個人面談について、学科としての学生数、各ゼミにおける受講生数が全体的に多く、特に人数が非常に多いゼミでは実施が困難である。ゼミの人数の適正化は、個々の教員を超えた学科全体、大学全体の課題であることを今年度も改めて確認した次第である。

なお、卒業論文が提出できないなどの理由で卒業延期となっている者の大半は、心身の不調で大学に来ない（来られない）学生が占める。他の学年でも、同様の理由でゼミの授業にほとんど出席していない学生は少なくない。これらの学生に対しては、学科の教員による通常の指導では対応が困難な場合が多い。今後も学生支援課や保健室など関連部門との連携が必須である。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

##### <所見>

「卒業論文執筆に向けての個別指導の推進」を目標してかかげ、学科として積極的に卒論指導を展開しており、その点は評価できる。ただし、行動計画5については、2016年度の具体的な行動がなく、改善すべき事項に記載されているのみであり、取り組みとして課題が残る。全体としては、卒業論文の提出率の上昇と卒業延期者の減少に鑑み、A評価とした。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標] 「読解と論述」を重視する「演習Ⅰ～Ⅲ」	
文学研究における基本的な知識・方法を学ぶ。「演習Ⅰ」では読解を中心とし、「演習Ⅱ～Ⅲ」では文学科4コースそれぞれの文献(作品)読解と自らの見解の表現を試みる。	
[達成基準]	
1. 学生が講義を正確に理解し、その内容を適切にまとめられるよう指導する。 2. 文献(作品)を正確に読みとらせ、その内容を適切な文章で表現させる。	
[行動計画]	
授業方法	
1. 文献(作品)の読解および論述の方法に関する基礎知識の修得。 講義によって、上記の理解と記憶を促す。 2. 文学科4コースそれぞれの具体的な文献(作品)解釈の技能の涵養。 実際に学生に担当させ調べ発表させることによって、上記の力量を養う。 3. 1・2を踏まえて自らの見解を論述する実践。 追加の調査・考察をも含めてレポートを書かせる。	
授業計画	
1. 文学研究の意義を学ぶ。 2. 取りあげる文献(作品)の概要および解釈上の留意事項を把握する。 3. 対象文献(作品)を精読し、読解上の必須知識を得る。 4. 読解内容の要約、解釈上の見解・所感を、適切に論述する。 5. 作成した論述文の講評を踏まえ、読解の深化をはかる。 6. 文献(作品)の魅力を探り、参照・参考文献の必要性を理解する。 1～6を振り返り、レポートを作成する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
演習Ⅰでは、これまでに引き続き作品の読解と解説を行い、年4回のレポートを課すことにより、読解能力の養成と記述能力の強化を図った。演習Ⅱ、演習Ⅲでも4コースでそれぞれ各分野または各時代の文学作品を精読し、学生に発表資料を作成させ、考察と検討を行うことで、読解能力、記述能力、表現能力のさらなる強化を図った。学生の能力には当然個人差はあるが、おおむね講義の内容を理解させ、文献の読解能力と文章表現力を向上させることができた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
演習Ⅰでは、講義を理解し、その内容を適切にまとめたレポートが多く提出されている。演習Ⅱ、演習Ⅲでは、多くの学生に、文献を正確に読み取った上で、自分の見解をまとめて表現する能力の向上が見られる。また、演習Ⅰのレポートののべ提出率が、昨年度の77.8%から80.3%に増加した。	
[改善すべき事項]	
レポートの提出率は、全体としてはやや上がっているが、クラスによってばらつきがある。さらに提	

出率を上げるよう取り組みを続ける。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ①-1. 演習Ⅰ学生レポート（英文学）およびレポート提出率一覧表
- ①-2. 演習Ⅱ学生レポート・レジюме（国文学・ドイツ文学）
- ①-3. 演習Ⅲ学生レポート（英文学）

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

学生のレポートの内容の質は様々であるが、それぞれに応じて丁寧な指導が行われている。それぞれの資質に応じて文学の読解に深く取り組んでいる様子が伺える。したがって、目標を目指した行動計画は概ね実行されていると考えられる。ただ20%の学生がレポートを提出していないということは、単に怠慢だからではなく、より根本的な問題があるものと思われるので、行動計画にもそれらに対応する方法を考えていく必要があると思われる。今後のより一層の努力を期待したい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標] 学生のケア	
第1・2学年の長期欠席者及び問題を抱えた学生への対応の検討と、持続的ケアの実施	
[達成基準]	
行動計画がすべて実行できたことをもって、達成と判断。	
[行動計画]	
<p>1. 1年生：授業担当者及び担任が緊密に連絡を取り、長期欠席に至ると思われる学生、あるいは精神的問題を有する学生がいないか、気をつける。その目的のため2014年度より実施している1年生と担任との面談を今年度も行なう。また、クラス別懇談会や学生支援課主催の「新入生クラス別茶話会」も同じ目的意識のもとに取り組む。</p> <p>2. 上記の如き学生が見出された時は、速やかに聞き取りなどを通し適切な対処を行う。</p> <p>3. 2年生：1年生の時の記録をもとに、授業担当者及び担任が見守りとケアを行う。演習Ⅱは各コースに分かれるので3年生進級への橋渡しも兼ねて各コースでも情報を共有する。</p> <p>4. 前後期1回ずつ学生支援課より依頼をうける長期欠席者調査に積極的な情報提供を行うと同時に、この情報を有効利用する。閲覧可能なこの調査表を、学科会議や小委員会の場で活用するとともに、適宜補足・改訂を行ない、今後の参考とする。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>今年度も1年生の担任は前期に面談を行い、学生の状況把握に努めた。面談率は、4クラス中3クラスで100%を達成し、全体では95%であった。これは昨年度の85.1%からかなり上昇している（根拠資料②-1）。1年生の指導教員は、演習Ⅰの前期前半のクラス担任が1年間継続して担当するが、演習Ⅰの授業自体は4人の教員がリレーして行うので、学生指導に役立てるために、長期欠席などの学生についての情報を共有するべく連絡を取り合った（根拠資料②-2）。また、このように密に連絡を取りながら、合同ガイダンス、合同懇談会を計画し、実施した。</p> <p>2年生以上の長欠調査についても継続的に情報を共有し、さらに新たな情報を把握すべく連絡を取り合っ（根拠資料②-3）、学科として学生の見守りとケアを行える状態の実現に努めた。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>面談や連絡により、授業から脱落する学生数を抑えることができた。</p> <p>面談率が上がった。</p>	
[改善すべき事項]	
指導教員、各コースの代表者（小委員）、学科主任の三者での情報交換をさらに密にする。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
②-1. 1年生面談率一覧表	
②-2. 学生（1年生）についての情報共有（サイボウズでの連絡）	
②-3. 2016年度後期長欠調査結果報告	
※個人情報につき取り扱いにご注意ください。	



**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

行動計画は十分に実行されていると考えられるので、目標は達成できたと判断する。ただし、効果が上がっている事項について、授業から脱落する学生数を抑えることができたと言えるためには、以前の数値との比較や留年率、授業科目の試験での不可判定の数の減少など他の指標のデータも提示できた方が好ましいと思われる。とはいえ効果は上がっていると判断できるので、今後も継続して学生のケアに取り組んでいただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標] 「文藝塾」運営の発展	
2015年度に達成した「文藝塾」行動計画の質を高め、新規事業を成就する。	
[達成基準]	
行動計画の実現	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 試行運営をふまえた「文藝塾」理念の確立</li> <li>・ 2015年度開講「文藝塾講義」の発展的継続（運営方法の改善）</li> <li>・ 2015年度実施「個別面談」の継続、また方法の検討</li> <li>・ 2016年度開講「文藝塾演習」の実施</li> <li>・ 2017年度以降の「文藝塾」運営（方策と施設）</li> </ul>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義および演習の実施を踏まえ、6回の「文藝塾授業打合せ」会議と1回の「文藝塾運営会議」を開催し、「文藝塾」理念の確立とその具体化を図った。</li> <li>・ 「文藝塾講義」では2015年度に引き続き津村記久子氏・白岩玄氏・木爾チレン氏など若手作家を講師として招聘したほか、4月には2015年度からの懸案であったリリー・フランキー氏の講演会も実施した。</li> <li>・ 外部講師を招かない時限には「文藝塾講義」担当の教員が交替で聴講者の「個別面談」に当たった。</li> <li>・ 「文藝塾演習」は小説創作の条件を整えるべく前期・後期各5本の文章作成を課し、その検討を通じて、聴講者の文章表現力養成と小説観構築をめざした。また前期・後期各3回実施したセミナーでは、新聞記者（多和常雄氏）・雑誌編集者（丹所千佳氏）・コピーライター（萩原健次郎氏・池村和紀氏）等の外部講師により、マスコミに必要な言語表現を学んだ。11月にはPHP研究所を訪問し、雑誌等メディア生成の現場と過程を見学した。</li> <li>・ 2017年度、さらに2018年度以降の「文藝塾」についても、カリキュラム・施設・資格・作品発表等の検討を随時行った。</li> </ul>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ もともと文章力を持っている学生が自己の表現力を客観視し、自己の資質を的確に判断して、自己の能力を適切に向上させられるようになった。</li> <li>・ 小説家と間近で話し合うことによって、小説家という存在を単に憧れの対象として仰ぎ見るのではなく、その仕事の方法や生き方を、自己の創作や生き方（具体的には職業選択）を考えるよすがとすることができるようになった。</li> <li>・ 文学・言論の仕事に携わっているのは小説家ばかりではないことや、メディアに関わるさまざまな仕事があることを知り、自己の適性を改めて探りつつ職業選択の範囲を拡大させた。</li> </ul>	
[改善すべき事項]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「文藝塾講義」「文藝塾演習」とともに意欲も自意識も高い聴講者が多いだけに、「個別対応」を十全に</li> </ul>	

行うには教員の適切な分担と十分な時間の確保が必要であるが、現在はまだ有効なシステムが確立していない。学生側と教員側のスケジュールの擦り合わせ等も含め（時間割外の時間設定等）、基本的なシステムを確立した上で臨機応変に対応することが望まれる。

・表現・創作を志す若者たちの集まりなので、人生観・芸術観・方法論等の齟齬や対立が生じることも少なくない。精神面で何らかの障害や疾病を抱えている者や、自作への批評に過敏な反応を示す者もいる。聴講者の作品や発言に対する対応や人間関係への配慮は、他の科目より数段こまやかに行う必要があると思われる。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ・文藝塾授業打合せ（10月6日実施）会議資料
- ・リリー・フランキー氏紹介チラシ（4月18日）講演会用：文藝塾講義
- ・津村記久子先生への質問・感想集（6月6日）：文藝塾講義
- ・木爾チレン氏 自己紹介（11月21日）文藝塾講義
- ・新聞記事の文章 by 多和常雄氏（5月26日）：セミナー（文藝塾演習）
- ・「探偵あるところに事件あり」「今、あなたの名を呼びたい」「ユキの一片」「こみやまいり」「傷」「Good deed」「常世の庭師」「囚人と看守」「ふたつ星」「ドラマティックカーテン」「代償」「徘徊」「真の友」「友人宇宙計画」「とある日常」（以上、前期・後期最終作品・課題自由）
- 「水がつく町」他1篇（以上、課題「水と人」）

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

大学という環境の中で、アカデミックとは逆の位置にある「文藝」に主体的に関わる方法を模索するという意欲的な試みが形を取り始めていることが分かり、目標を達成しつつあることは評価できる。成果としての作品もそれぞれの学生の個性が反映されたものと言え、これらを指導することに教員が腐心している様子が伺える。ただし、改善すべき事項に、精神的な問題が生じやすいことが指摘されているので、今後はなお一層の注意を払った運営が望まれる。

<自己評定> B	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>「演習 I」「演習 II」「演習 III」の授業を通じて、社会に氾濫するさまざまな情報や資料を読み解き、自分の言葉でまとめたものをわかりやすく伝える能力の育成を行う。「演習 I」では基本的な文化の概念や資料の読解・要約の方法を教え、「演習 II」ではそれらの学びや技術を具体的なゼミ地域分野に応用させる。「演習 III」では、それをさらに発展させ、問題設定・仮説・論証という定型を踏まえた上で独自の見解を提示させる。</p>	
[達成基準]	
<p>「読み」に関しては、各種資料の理解に必要な基本的知識と、重要な情報を見分けて内容を正確に把握できる力を養成する。「書き」に関しては、第三者への伝達に必要な客観性を備えた発表レジュメやレポートを作成できるよう学生に指導を行う。また、情報を発信するだけでなく、他者との討論などを通して学生が自らの考えを深める機会を持たせる。</p>	
[行動計画]	
<p>「演習 I」では、コメントシートや要約課題などの提出と添削といった文章のやりとりに加え、視聴覚資料を効果的に利用する。文献だけでなく視聴覚資料から情報を読み取って書き出す訓練や、相互批評によって自分の作成した文章や発言に客観性をもたせる訓練を行う。レジュメ作成や発表については学生によって能力に開きがあるため、演習 I の早い段階でレジュメ作成を伴う簡単な発表を全員に行わせ、レジュメ作成や発表が苦手な学生を特定した上で指導が行えるようにする。さらに、その情報を学科内で共有して次の担当教員に引き継ぐ。「演習 II」では各ゼミの分野に即した資料収集のやり方を指導し、資料の読み込み・分析・発表を経てレポートをまとめさせる。その際、パワーポイントを用いた発表に加えて、期末のレポート以外に何度かまとまった文章を書かせる訓練も行う。また、とりわけ「演習 III」以降においては、発表やレポートが単なる調べ学習に陥らないよう注意を促すとともに、相互批評の際に「発想の独自性」という観点からもコメントや評価を行うよう指導する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>「演習 I」では主にグローバル化や異文化理解について、「演習 II」では専攻地域に関連するテーマに重点を移しながら、情報の要約や説明、発表の練習を行った。要約やコメントシートなど記述式課題の提出と添削、また、グループによる口頭発表や討論・相互批評を通じて、文化的テーマに関する要点や意見を口頭や筆記でわかりやすく伝える力のある程度伸ばすことができた。「演習 III」からは学生による個別の発表が中心になるが、「問題設定・仮説・検証」という定型が守られているかという評価基準の他に「発想の独自性」を教員が積極的に評価することにより、学生のコメントや意見交換の中でも発想の独自性を評価する視点が見られるようになった。資料の読み方、レポートの書き方やパワーポイント等を用いた発表も演習での指導と練習を通じて学生の上達が確認できた。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>「演習 I」では、早い段階から資料の読解や分析、要約作成、レポート作成などの実践を重ねることで、学科において必要なスタディスキルの基本を学生が身につけることができた。視聴覚資料を用いた学</p>	

習は効果的であり、学生の関心も高く取り組みも積極的になることが分かった。また、相互批評やコメントシートによって、学生が自分の発表に対するフィードバックを得られるため、特に「演習 II」「演習 III」では、受けた指摘や質問に基づく研究の深化・進展や、プレゼン能力の向上にも効果が見られた。また、行動計画にはなかったが、演習におけるグループワークの活用に関して、社会学科の教員を招いて学科独自の FD を行い、次年度の演習に活かせるヒントを得た。

[改善すべき事項]

「演習 I」については、前期・後期で担当教員が替わるため、前期終了時点で学生の要約・読解・作文能力や学習意欲に関する情報の引継ぎが重要であるが、今年度はそれが個別の教員間でなされただけで、学科としての情報共有という形では実現できなかった。

**4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

- ① 「演習 I」での実践例
- ② 「演習 I」でのプレゼンの相互批評例

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

担当教員間での学生情報の引継ぎがうまくいっていない点が反省されているが、本題の演習 I・II・IIIそれぞれにおいて学生に期待されている成果が達成されており、A と判断できる。

<自己評定> B	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>学科主催の各種行事や、学科所属教員の学外での活動を学科にフィードバックする。また、そのように学科が大学や社会に貢献している実態についても大学ホームページや学科オリジナルサイトなどを通じて広く伝えていく。</p>	
[達成基準]	
<p>各種行事について学科全体で計画を立て、一年を通じて体系的な行事展開ができるようにする。それらの活動案内や報告、および教員の学外での活動について、大学ホームページや学科オリジナルサイトで発信する。学科による行事終了後はアンケートをとり、来場者の反応を分析して次の行事に活かせるようにする。また、学科オリジナルサイトへのアクセス数が1日平均100名を超えるようにする。</p>	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 年度初頭に各種行事の年間計画を立てる。学内で実施する行事だけでなく学外で実施する行事についても学科で情報を共有し教育に活かす方法を検討する。</li> <li>2. 今後の広報や情報発信に活かすため、学科の全学生を対象にアンケートを行い、在学生在がどのように国際文化学科を選び、何を求めて入ってきたかを把握・分析する。</li> <li>3. 国際文化の学びが社会に出ていくにあたってどのように役に立ったのかについて卒業生を中心に調査し、卒業生たちの活動を伝える紹介記事をオリジナルサイトに掲載する。</li> </ol>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>国際文化学科のゼミでの調理実習、学園祭に参加した様子や、学科主催イベント「あま〜いホラーカフェ」の案内などを学科オリジナルサイトのブログで逐一報告し、学科としての活動の様態を発信することができた。とりわけ、国際文化学科主催のチベット映画上映会としてソントルジャ監督作品『河』を7月13日に上映し、その告知だけでなく教員による映画評も記事として掲載したことには単なる広報に留まらない意義がある。さらに、韓国・朝鮮文化ゼミ主催イベントとして9月20～30日にロジャー・シェパード写真展『JUST KOREA — 朝鮮半島の山々は連なる』写真展を開催し、メディアの取材と報道もあって多くの参加者を得たことは、本学と本学科の文化・教育活動を広く社会に知らしめる上で大きく貢献したと考えられる。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>前年度に引き続きオリジナルサイトの記事投稿者や投稿内容は多様であり、国際文化学科の持つ多様性・オムニバス性を反映した内容になっている。更新頻度についても、2016年度で32件の投稿数(2017年3月7日現在)があることから、月に2～3回の更新ペースを維持できた。また、年間の学科行事予定についても、前期・後期で一定の見通しを立てて準備・実施することができた。さらに、映画上映や写真展などのイベントを学科独自に行っていることも、大学の社会貢献という点で重要な成果といえるだろう。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>オリジナルサイトの閲覧数が減少傾向にあるため、更新の内容や頻度についてさらなる工夫が必要。</p>	

卒業生の進路報告記事についても実現できておらず、体験記などの投稿を呼びかける必要がある。また、学生に対するアンケートは実施したが、その結果をどのように教育や広報に活かしていくかという点についてはまだ十分に検討できていない。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

③大谷大学文学部国際文化学科オリジナルサイト (<https://otaniis.wordpress.com/blog/>)

④国際文化学科オリジナルサイトの統計情報

⑤調理実習などの模様を伝える国際文化学科オリジナルサイトのプリントアウト

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

オリジナルサイト閲覧数 100 人という目標はクリアできていないが、それを通じて学科活動を広報していくという目標は十分に達成されている。

<自己評定> B	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
2016年度は文化環境コースが発足して4年目となり、完成年度を迎える。卒業論文の執筆に際し、現地調査を加味した研究を指導する。コース所属学生が、第2学年～第4学年にわたるので、学年を超えた縦のつながりを意識したゼミ運営を実施する。学科講義科目「環境文明論2」では、前回とは異なる視点で授業を展開し、多様な学びの機会を提供する。これらの新たな授業実践を通して、文化環境コースを学生募集力のあるコースとして発展させる。	
[達成基準]	
授業内容の改訂と現地調査を軸としたゼミ運営を通じて文化環境学の魅力を伝え、今年度の新第2学年の文化環境コース学生を10名以上確保する。	
[行動計画]	
文化環境コースの卒業論文として野外調査を実施する際には、できる限り（1学生あたり最低1度は）現地指導をしたい。前期終了時と年度末において研究成果報告会を第2学年～第4学年の全コース学生参加で実施する。これらの報告については学科オリジナルホームページに記載し、一般の人々に対してわかりやすく伝えていく。講義科目「環境文明論2」では、自然災害と文化の関係に詳しい講師を新たに迎え、これまでと違った視点での授業を実施する。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
第2～4学年のゼミでは前期・後期ともに期末発表会をコース全学生参加で実施した。これにより、他学年との縦のつながりをつくることができた。「環境文明論2」では自然災害と人々の暮らしについてこれまでにない視点で授業を展開した。第3学年は1名増えて9名になった。第1学年のコース希望者は現在6名である。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
第2・3学年の現地調査では、学生自ら課題を設定して現地でデータ収集することで、主体的な課題解決能力の向上をはかった。第4学年の卒業論文では積極的に現地調査を行い、オリジナルデータに基づく論文が執筆できた。この積極性は、すべての学生の就職が決まるなど、行動力のある人物育成に活かされていると思われる。	
[改善すべき事項]	
第2学年でのコース生確保が課題である。学科オリジナルのウェブサイトでは、演習や卒論の成果を公開し、文化環境学の魅力を発信している。ウェブサイトをさらに充実させるとともに、第1学年の授業でも魅力の発信に努力したい。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
⑥文化環境コースの活動を伝えるオリジナルサイト記事のプリントアウト	



**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

学生数の確保は目標通りに達成できてはいないが、当該コースの学習成果は確実に上がっていると判断されるため A とした。

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
国際文化学科における学びの特徴のひとつとして、座学にとどまらず「体験」に依拠した学びに重点を置く点があげられる。2016年度は、これまで各教員が個別に取り組んできた体験型教育実践を連携させ、学科としての学びを推進することをめざす。	
[達成基準]	
演習Ⅳを除く7割以上のゼミで「体験」にもとづいた学びの機会を提供し、その教育成果について年2回以上学科内で点検・共有する機会を持ち、学科の教育活動にフィードバックする。	
[行動計画]	
調理実習、音楽や舞踊の練習、フィールドワークなどを通じた体験型教育を実施し、概論や講義において学んだ知識と連動させる工夫をする。具体的には、体験型授業の事前・事後学習、体験学習後の振り返りのコメント執筆、プレゼン、ミニレポート、あるいは紹介映像などの形での体験学習報告、体験から発展させた研究発表などを行わせる。また、それをゼミの枠内だけでなく、可能な範囲でコース内の他のゼミと連携・協力できるように調整する。体験型授業については、3分程度の紹介映像を撮影し、ホームページ上から閲覧できるようにするなど、視覚的・聴覚的効果を利用して文化への学びを深める。さらに、そうした成果を学期末ごとに学科内で点検・共有し、学科における教育活動にフィードバックする。	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
体験型の学びについては、調理実習や街中でのフィールドワーク、野外調査など、7割以上とはいかないものの半数以上のゼミでは実施することができた。実施の様様については学科オリジナルサイトで独自に発信したり、写真がCAMPUS LIFEなど広報誌に掲載されたりした。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
体験型授業を行ったクラスではゼミ内でのメンバーシップが向上し、グループワークや討論、相互批評を行いやすい雰囲気作りに大きく貢献した。体験型授業についてはオープンキャンパスやCAMPUS LIFEでも広報され、いわば対外的な学科活動の「顔」としての役割を果たしている。とりわけ8月6日のオープンキャンパスでは全コースの学科教員が協力し、模擬授業の他に、ダンスや楽器演奏、利き水といった体験型イベントを実施し、高校生に学科の体験型教育の一端を効果的にアピールすることができた。	
[改善すべき事項]	
体験によってどのように学びを深めるのかという点に関する学科としての検証が不十分。また、体験型授業の活動について学科で動画を作成することはできていない。体験型授業に関する話し合いも年2回は実施できず、3月の学科FD会議で話し合うことが予定されているのみである。共有と話し合いのための時間・機会が少なかったため、体験型授業を学科として十分に連携させるには至っていない。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
④調理実習などの様様を伝える国際文化学科オリジナルサイトのプリントアウト	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

体験学習の実践は確実に行われているが、当初の到達目標が抽象的であるため B と判断せざるを得ない。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について</p> <p>1. 演習Ⅰにおいては、情報の収集・必要な情報の取捨選択・情報の再構築</p> <p>前期：他者の話（講義）を聞いて、その内容をノートに取り、レポートで再現できるようにする</p> <p>後期：文献を読み、その内容をまとめる力を養成する</p> <p>を目標とする。</p> <p>2. 演習Ⅱにおいては、演習Ⅰの内容をふまえ、他人の調査した結果を自らのものと組み合わせ、他者の前で発表し、また他者の発表内容を短文でまとめる力を養成する。</p>	
[達成基準]	
<p>1. 演習Ⅰ前期を通して、学生が以下の項目を主体的に行えるように指導する。</p> <p>(1) iPadの導入とその意味が理解できる。</p> <p>(2) 他者の話（講義）を聞いて、その内容を5W1Hの要素を含むメモを取る必要性が理解できるようになる。</p> <p>(3) メモをもとに、用語の意味を「自分がわかるもの」「辞書をひいてわかるもの」「辞書に記載のなかったもの」に分類する。「辞書をひいてわかるもの」や「辞書に記載のなかったもの」に対し、iPadを利用して自分で調査ができるようになる。</p> <p>(4) メモを取った内容について、レポートで再現できるようになる。</p> <p>2. 演習Ⅰ後期を通して、学生が以下の項目を主体的に行えるように指導する。</p> <p>(5) 各自で研究テーマを考えた後、関連文献が検索できるようになる。</p> <p>(6) 文献を読むことができ、さらに、その内容を要約することができるようになる。</p> <p>(7) 調査結果を基にして、レポートの形式に再構築できるようになる。</p> <p>3. 演習Ⅱ前・後期を通して、学生が以下の項目を主体的に行えるように指導する。</p> <p>(8) 他者のメモと自分のメモから、発表のための構想を企画できるようになる。</p> <p>(9) プレゼンテーションツールを利用して発表できるようになる。</p> <p>(10) 他者の発表を短いメモにまとめることができるようになる。</p>	
[行動計画]	
<p>1. 演習Ⅰ前期を通して、学生に以下を行わせる。</p> <p>(1) iPadの導入とその意味を理解させる。</p> <p>(2) iPadにメモアプリをインストールさせて、メモを取らせる。</p> <p>(3) iPadに辞書アプリをインストールさせて、毎回アクセスするように指導する。また、iPadで作成したメモの用語について、理解できないものについては自分で検索させる。</p> <p>2. 演習Ⅰ後期を通して、学生に以下を行わせる。</p> <p>(4) レポートにまとめる。</p> <p>(5) 自分で研究テーマを考え、それに関連する文献を検索させる。</p> <p>(6) 人文情報学に関連する論文を要約させる。</p>	

<p>(7) 自分で行った研究の内容をレポートとして出力させる。</p> <p>3. 演習Ⅱ前・後期を通して、学生に以下を行わせる。</p> <p>(8) 発表用の企画書を作成する。</p> <p>(9) プレゼンテーションツールを利用して発表の下準備を行い、それを利用して発表する。</p> <p>(10) 他者の発表を短いメモにまとめる。</p>
<p><b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b></p>
<p>(1) から (10) までの全てを 100%実施した。</p>
<p><b>3. 【点検・評価】</b></p>
<p>[効果が上がっている事項]</p> <p>本講義を単位取得できた学生は、レポートを所定の形式に従って作成することが概ねできると判断可能である。</p>
<p>[改善すべき事項]</p> <p>(1) メモの取り方の教え方に、更なる工夫の余地がある。</p> <p>(2) 2016年9月より一部利用開始した慶聞館（中央・南エリア）では、人文情報学科専用教室以外でのPC利用が可能となりiPad利用が必須である授業が減少していることから、iPad利用に関するより一層の創意工夫が必要である。</p>
<p><b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b></p>
<p>(1) 人文情報学演習Ⅰ前期講義内容（別添）</p> <p>(2) 人文情報学演習Ⅱ「前期プレゼン合同発表会」</p> <p><a href="http://www.otani.ac.jp/nyushi/opencampus/2016/0717.html">http://www.otani.ac.jp/nyushi/opencampus/2016/0717.html</a></p>

<p><b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b></p>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>演習ⅠでiPadを利用してレポートを作成する基礎的なスキルを身につけ、演習Ⅱではそれを踏まえて他者に向けて発表するという形で、演習Ⅰと演習Ⅱの連続性を意識したカリキュラムが構成されている。今後も継続して、さらなる成果の検証をしていただきたい。</p>

<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>保証人への丁寧な情報伝達を行う。</p> <p>単位不足、あるいは成績不振の学生へは、年度末に保証人に連絡し、情報共有率を90%以上にする。</p>	
[達成基準]	
<p>(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明する。</p> <p>(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生のうち、年度末に保証人に対する連絡を行う。</p> <p>(ア) 卒業年次の留年学生のうち、保証人との密接な情報共有が事態改善に有効と判断しうる学生に対しては、演習Ⅳ（ゼミ）担当教員から保証人への電話連絡率を90%以上にする。</p> <p>(イ) それ以外の留年学生には、本人と各演習担当教員との面談を基本とし、本人に連絡がつかない等特別の配慮を必要とする場合の保証人への電話連絡率を90%以上にする。</p> <p>(ウ) 各種の判断においては、学科会議およびサイボウズを利用し、学科内での情報共有にまず努め、その結果から総合的に判断する。</p> <p>(3) 成績表の説明書については、保証人が学生を指導しやすいように見直す。</p> <p>(1)・(2)・(3)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。</p>	
[行動計画]	
<p>(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明し、学科教員を紹介する。</p> <p>(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習（ゼミ）担当教員が保証人に電話連絡を行い、必要に応じて各課と連携を取りつつ面談を行う。</p> <p>(ア) 学科会議およびサイボウズにおいて、各演習（ゼミ）での成績不振の学生に対する情報交換を行い、面談の必要性等の状況を確認する。</p> <p>(イ) 学生の諸情報について、関連する各課と情報交換を行い、連携を強化する。</p> <p>(3) 成績表の説明書を修正する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>(1) 入学式直後に講堂にて学科主任からご参加いただいた保証人に対し説明した。</p> <p>(2) 全国保護者懇談会（本学会場）個別相談において説明した。</p> <p>(3) 授業の出席率がよくない学生に対しては、学生支援課とも連携を取り、本人を注意するとともに、必要に応じて保証人への連絡を行い、状況を確認するとともに本人への注意を依頼した。</p> <p>(4) 成績表の説明書についての進捗はない。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>保証人との電話および面談は、大学の体制として十分なコミュニケーション手段が確立されており、必要に応じて気軽に相談できる雰囲気を保証人に感じていただいたものと判断する。</p>	

[改善すべき事項]
(1) 学内通信手段であるサイボウズ利用の運用面については、今後とも教職員全員が改善を図り、タイミングを逸しないよう円滑な情報共有を進める必要がある。
<b>4.【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>
(1) 2016年度入学式分担表（別添）

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>面談や電話連絡によって保証人への丁寧な情報伝達を行うことや、学内での情報共有を進め連携を強化することは、学生指導に有効であると考えられる。成績表の説明書の修正は2016年度も行われなかったが、保証人が学生を指導しやすい形に変えることは、保証人と大学の連携を強化することにもつながると思われるので、引き続き取り組んでいただきたい。</p>

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>学生の学習意欲を喚起する。</p> <p>学科に関連の深い資格試験に合格させたり、学科で必須のタイピング技能を向上させたりすることで、勉強全体に対しても「やればできる」という積極的な姿勢を身につけさせる。</p> <p>科目によっては、その授業内容を「学び紹介」として公開し第三者からの評価を受けることで、授業に対するモチベーションを高める。</p> <p>全学科生を対象とした授業の満足度・学習意欲の充実度についてのアンケートを予定し、全学生に対する回答率を50%以上とする。</p> <p>卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。</p>	
[達成基準]	
<p>(1)学科に関連の深い資格試験を紹介し、興味のある学生に対しては受験対策を考える。</p> <p>(2)タイピングコンテストを実施し、コンテストに向けて練習させる。</p> <p>(3)デジタル・ライブラリーコースが行ってきた見学会と図書館周辺活動を、学科学生全体を対象として引き続き実施する。</p> <p>(4)2015年度からはじめたビブリオバトルを、引き続き実施する。</p> <p>(5)授業内容について、できるだけ「学び紹介」としてホームページその他に公開する。</p> <p>(6)全学科生を対象としたアンケートについては、項目を完成させ実施する。</p> <p>(7)卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。</p> <p>(1)から(7)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。</p>	
[行動計画]	
<p>(1)学科に関連の深い資格試験について、前期については1号館4階人文情報学科サポート室前掲示板にポスターを貼り紹介することで情報を公開する。後期については、学科の専門教育の場が慶聞館に移るため、後期に開示されるはずの利用基準に沿いながら、適切な掲示場所を確保する。さらに、興味のある学生に対しては演習（ゼミ・クラス）で受験対策を考える。</p> <p>(2)タイピング技能の向上を図り、学習へのモチベーションを持たせる。演習（ゼミ・クラス）で技能の向上を図るよう促し、コンテスト情報を告知する。また、コンテストへの参加とともに、スタッフとしての参加も募り、コンテストの周知徹底を図る。</p> <p>(3)ビブリオバトルをはじめ、学生が企画運営に参画できそうな学科イベントに、学生の積極的な参加を誘導する。</p> <p>(4)授業内容について、オープンキャンパスなどを通じて「学び紹介」として公開する。</p> <p>(5)全学科生を対象としたアンケートを作成し、実施する。</p> <p>(6)3月の学科会議で「成績優秀者」を決定する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>(1) ITパスポート試験については、8月第1週の5日間および2月第1週の5日の2回、学習意欲のある学生に対して試験対策集中講座を開催し、各々10名程度が参加した。</p>	



- (2) 来年度からは全3年生が大学の費用で受験する施策を実施することとしており、今後、徐々に合格率の向上を期待する。
- (3) ビブリオバトルについては参加意向の学生数が少なかったことから今年度の実施は見送った。
- (4) タイピングコンテストについては、準備の都合で来年度に入って5月連休明け早々に1、2、3年生を対象として実施すべく具体化している。
- (5) デジタル・ライブラリーコースにおいて野洲図書館見学等を2回に渡って実施した。
- (6) 年度末(3月27日実施予定)には、Welcome Back To Campus day と称し新2、3年生を主な対象としたITパスポート試験(IPAによる説明)、CG-ARTS検定(CG-ARTS協会による説明)についての説明会を実施し、これらの試験合格意欲を学生に持たせることとしている。
- (7) 情報表現学特殊講義2(Project Based Learning)では、オープンキャンパスに訪れる高校生に対してポスターと動画を使って慶聞館についてプレゼンテーションすることを課したが、全受講学生の学習意欲の高まりを確認できた授業となった。
- (8) 学生の学習意欲を高めるためのツールとして2014年度から利用を開始したMoodleの勉強会を非常勤講師も含め8名の参加を得て今年も2月に実施し、利用方法の共有と改善に努めた。
- (9) 4年生の卒業論文については、ベスト卒論賞および準ベスト卒論賞、各々1件を学科内で選出することと、ゼミ単位で優秀賞を選出することとしており、現時点で選考を進めている。卒業式までに学科サイトにて公表できるよう準備中である。
- (10) 人文情報学の研究の最前線2016(ワークショップ)の開催は、教員による研究内容を学内で披露することにより学生のゼミ選択の一助とした。

### 3. 【点検・評価】

#### [効果が上がっている事項]

- (1) ITパスポートについては、全3年生の受験を必須としたことから徐々に学生の間で、合格に対する意欲が高まっていると推測する(iPadの利用が人文情報学科のモノについての特徴であれば、今後、ITパスポート試験合格がコトの特徴となることを期待している)。

#### [改善すべき事項]

- (1) 年度内に実施できなかったビブリオバトルおよびタイピングコンテストについては主導する教員のみならず、コース毎に、その目的や目標、実施体制、スケジュールなど早期に検討を始めることとする。
- (2) 学生が外部との関連を持つ機会としてオープンキャンパスを積極的に利用する。

### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- (1) 2016年8月のITパスポート試験集中講座の実施  
[http://www3.otani.ac.jp/hi/whats\\_new/ipass/](http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/ipass/)
- (2) 2017年2月のITパスポート試験集中講座の実施  
[http://www3.otani.ac.jp/hi/whats\\_new/it\\_passport201702/](http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/it_passport201702/)
- (3) デジタル・ライブラリーコースの野洲図書館見学(別添)
- (4) 2017年3月開催のWelcome Back to Campus  
[http://www3.otani.ac.jp/hi/whats\\_new/2017welcomeback/](http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/2017welcomeback/)
- (5) 情報表現学特殊講義2のPBL  
<http://www3.otani.ac.jp/hi/project/presentations/>
- (6) 社会学科公開講義の動画撮影

<http://www3.otani.ac.jp/hi/project/kenya/>

(7) Moodle の人文情報学科内勉強会案内メール (別添)

(8) 人文情報学の研究の最前線 2016 (ワークショップ)

[http://www3.otani.ac.jp/hi/whats\\_new/lehi2016/](http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/lehi2016/)

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

実施できなかったイベントもあるが、学生の学習意欲を喚起するために様々な取り組みがなされており、それぞれが効果を上げていると思われる。今後こうした取り組みがさらに充実したものとなり、一層学生の意欲喚起につながることを期待する。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
旧4コース制から新2コース制（「情報マネジメントコース」と「メディア表現コース」）への移行を学外に周知する。	
[達成基準]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・周知対象を3種類に分類し、対象毎の実施率で判断する。</li> <li>・なお、上記基準設定に関わらず、新入生定員（100名）充足をもって100%の達成とする。</li> </ul>	
[行動計画]	
<p>(1) 行動計画概要</p> <p>(ア) 対象を高校生・高校の進路指導教員・他大学教職員の三種類に分類し、それぞれの層に対し、人文情報学科の新コース移行の妥当性と新規性の理解を促す。</p> <p>(イ) 具体的な行動は、高校生が進路を決める9月末迄の半年間に集中させる。</p> <p>(2) 高校生を対象に、イベントや動画配信を行う。イベントについては、入学センター主催「オープンキャンパス」との連動を想定するが、連動が難しい場合、学科単独で行う。</p> <p>(ア) 新コース移行の妥当性と意義が具体的に理解できるよう、教員と学生の対談を公開する。</p> <p>(イ) オープンキャンパス開催日に、在学生の学習成果の発表の場を設け、高校生に公開する。</p> <p>(ウ) 過去の講義成果物の動画を、YouTubeで配信する。</p> <p>(3) 高校の進路指導教員を対象に、学科独自の教育教材及び講義成果物を持参しての教員による高校訪問を行い、新コース体制移行の妥当性と将来性を理解していただく。</p> <p>(4) 大学教職員を対象に、公益社団法人 私立大学情報教育協会主催の「教育改革 ICT 戦略会議」(2015年度)において、学科の取り組みを発表する。</p>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
<p>(1) 高校訪問を計画し、時間の許す範囲内で実施した。</p> <p>(2) オープンキャンパスにおいては模擬授業等を次の通り実施し、人文情報学科の学び、2コース制の特徴などについて説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 7/17 「判ってくれないからこそ伝えたい」</li> <li>(1) 6/12 「面白動画の作り方 -なぜ面白い?-」</li> <li>(2) 8/6, 7 「人文情報学科の学び紹介コーナー」</li> <li>(3) 8/7 「iPad 紙芝居」</li> <li>(4) 8/21 「あなたの欲しいものは? -ここを知る情報技術-」</li> <li>(5) 9/18 「たった40分でわかるIoTビジネス」</li> <li>(6) 12/11 「日本で一番新しい大学キャンパス、慶聞館の紹介」</li> </ul> <p>(3) 私立大学情報教育協会主催の「教育改革 ICT 戦略大会」で学生の学習意欲啓発方法についての研究内容について発表した。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	

<p>2 コース制を開始した 2015 年度の入学者数の一時的な減少に比べて、未だ定員には満たないものの大きく入学者数が増加していることは、2 コース制について高校生、高校、保護者の理解が増しているものと評価する。</p>
<p>[改善すべき事項]</p>
<p>来年度から 4 年目となる 2 コース制（メディア表現、情報マネジメント）の特徴をさらに明確化する具体的な施策が必要である。対外的な周知はもはや必要ないが、内部における今後 4 年間のコース別の差別化について検討する必要がある。</p>
<p><b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b></p>
<p>(1) 12 校への高校訪問計画（メール文書）（別添）</p> <p>(2) 2016 年度オープンキャンパスでの模擬授業等  <a href="http://www3.otani.ac.jp/hi/project/2016showclass/">http://www3.otani.ac.jp/hi/project/2016showclass/</a>  <a href="http://www.otani.ac.jp/nyushi/opencampus/2016/080607.html">http://www.otani.ac.jp/nyushi/opencampus/2016/080607.html</a></p> <p>(3) 教育改革 ICT 戦略大会へ参加  <a href="http://www.juce.jp/LINK/taikai/taikai2016.htm">http://www.juce.jp/LINK/taikai/taikai2016.htm</a></p>

<p><b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b></p>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>2 コース制への移行を周知するための様々な取り組みの積み重ねが、入学者数の増加につながったと考えられる。[改善すべき事項] で述べられているように、それぞれのコースの特徴が、今後さらに明確になることが期待される。</p>

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
演習Ⅰ・Ⅱにおける「読む」「書く」「話す」「聞く」の充実を、前年度までと同様に継続的に行い、演習Ⅲでの取り組みに発展させる。	
[達成基準]	
「行動計画」の①～③がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおいて、以下の①～③を行動計画とする。(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの段階性・発展性については後に示す)</p> <p>①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する(読む・書く)。          ②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する(話す)。          ③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する(聞く)。</p> <p>演習Ⅰにおいては、教育学・心理学分野における基礎的な文章を対象とする。演習Ⅱでは、刈谷剛彦『学校って何だろう——教育の社会学入門』(2005)、柏木恵子『子どもが育つ条件—家族心理学から考える—』(2008)を共通のテキストとして、グループで発表箇所を分担し、報告を行う。具体的な行動計画は、演習Ⅰと同じであるが、演習Ⅰよりも発表箇所の分量が多くなり、読解しまとめる力がより高度になる。演習Ⅲにおいては、授業担当者ごとの専門領域に関連した文献であり、学生各人の卒業論文作成の基礎となる文献を対象とし、より発展的・専門的な取り組みとする。</p>	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
<p>演習Ⅰでは、授業担当者 6 名が教育学・心理学における基本的な文献を一つずつ選び、それらをまとめたテキストを作成し、授業に用いた。演習Ⅱでは、上記の二冊を共通のテキストとして使用した。演習Ⅲでは、授業担当者の専門領域に関連した文献や卒業論文作成の基礎となる文献を用いた。それぞれの授業においては、授業担当者が、年度初めの話し合いにより確認した目標・行動計画を常に意識して授業を行ったため、行動計画の①②③すべてにわたって学生を支援することができた。</p> <p>例えば、「①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する(読む・書く)」については、グループごとに担当発表箇所を決め、発表レジュメが作成できるように支援した。「②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する(話す)」「③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する(聞く)」については、授業内で適宜支援を行った。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>行動計画の①②③について、学生ほぼ全員が、自分なりに取り組み、一定の効果を上げた。①については、演習Ⅰの第 1 回目の授業で担当教員がレジュメの作成方法と発表の仕方の見本を示し、授業後、最初に報告する班に個別指導を行い、第 2 回目から学生に発表を課したことで効果が上がった。②③については、報告の仕方や聞く態度・質問の仕方などについて具体的な指導をきめ細かく重ねたことが効果的であった。毎時間の地道な指導により、①～③のすべてに効果が上がったといえる。このよ</p>	

うに、演習Ⅰでの①～③の取り組みが読む・書く・話す・聞く力の基礎となり、演習Ⅱでより高度な読解・まとめ・報告のスキルを身につけ、演習Ⅲでさらに発展的・専門的なスキルを身につけることが可能となる。こうして第4学年の演習Ⅳにおける取り組みと卒業論文作成に展開するものと考えられる。

[改善すべき事項]

演習Ⅰ・Ⅱは基本的にグループ発表なので、一見、個別の能力差が表に現れにくいですが、演習Ⅲでは、個人で発表する機会も増える。卒業論文指導の際に、話す・聞く力に比べ、読む・書く力が弱いことが露呈する者もいる。なるべく演習Ⅰ・Ⅱの段階で、必要に応じて個別指導を入れながら、読む・書く力を鍛えていく必要がある。

**4.【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

演習Ⅰ後期のレポート

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

演習Ⅰと演習Ⅱにおいて、授業担当者が目標・行動計画を意識しながら、共通テキストを用いて、学生の「読む」「書く」「話す」「聞く」能力の向上を図るという取り組みは高く評価でき、演習Ⅲ以降の、より専門的な内容についての学習に、学生をスムーズに移行させる効果を上げていると思われる。

[改善すべき事項]で述べられているような、グループ発表では表面化しにくい課題を早い段階で見つけられれば、さらに充実した学びが期待できる。

<自己評定> A	<委員会評定> A
<b>1. 【2016年度の目標等】</b>	
[目標]	
教職志望者のキャリアサポート体制の充実をはかる。	
[達成基準]	
「行動計画」の①～③がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
<p>①保育士資格認定試験の受験サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業や個別指導によるサポートやゼミ担当者による面接指導など</li> </ul> <p>②教員採用試験に対するサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初等科教育学習会（1年生・2年生対象）を月1回開催</li> <li>2年生の初等科教職学習会は、教員が講師役となり教科ごとに開催</li> <li>・自発的なグループ勉強会のサポート</li> <li>・2次試験前の直前学習会のサポート</li> <li>相談員の先生方と協力し、面接・実技・模擬授業に対応できるようにする</li> </ul> <p>③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学科会議での情報共有</li> <li>・情報をもとにしたゼミでの面談・指導</li> </ul>	
<b>2. 【2016年度の達成状況報告】</b>	
行動計画の①～③のそれぞれについて、以下に達成状況を報告する。	
<p>①保育士資格認定試験の受験サポートについて</p> <p>教育・心理学科の学生の中で保育士資格認定試験を受験するのは少数のため、個別の対応となることが多い。以下に、各先生方の行ったサポートをいくつかあげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノ弾き歌い実技の事前指導</li> <li>・過去問を対象とした指導（個別指導が多いが、「発達心理学（幼）」の授業においても対応）</li> <li>・図画工作関係における幼児が扱いやすい材料を使っての製作実習指導</li> </ul> <p>②教員採用試験に対するサポートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初等科教育学習会を1年生、2年生それぞれについて、月一回実施</li> <li>・自発的な模擬授業や勉強会が複数行われているため、教室を確保し、指導・助言を行う</li> <li>・教員採用試験直前に、希望者を対象とした音楽や体育の実技指導を実施</li> </ul> <p>このほか、2014年度から引き続き行われている「教職科目担当教員による希望者を対象とする定期的な勉強会」を年間通じて実施、夏休み・春休みにも実施し、充実をはかった。</p> <p>③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3名の教員が教職支援センターミーティングに参加し、直前講習の受講状況・教員採用試験受験状況などの情報を学科会議（教職課程初等部会も兼ねる）で報告</li> <li>・「教育・心理学科について（ご案内・ご依頼等）」「教員採用試験結果について」など、サイボウズにて教職支援センターと教育・心理学科の教員が情報を共有</li> </ul>	

・1年生、2年生の「教職学習会」における学生への周知とビデオによる記録を教職支援センターと共同で実施

・学科教員と教職支援アドバイザーによる直前講習の実施（個人面接・集団面接・集団討議の練習・模擬授業への指導助言など）

### 3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①は、保育士資格認定試験の受験サポートが学科教員の共通認識となり、ゼミ担当学生へのサポートだけではなく、他の学生へのサポートも実施する教員が増えてきている。

②は、自発的少人数の勉強会の他に、教員の支援も伴った自発的な勉強会が軌道に乗り、それぞれの希望にあった勉強会が定着した。

③は、教職支援センターと様々な情報の共有を行い、学生に不利益にならないような支援体制が整ってきた。

[改善すべき事項]

教職をめざして入学してきたものの、途中で方向転換し、教職以外の道を選択することになった学生へのキャリアサポートが充分ではない。進路変更した学生への指導について十分な配慮が必要である。

### 4.【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

特になし

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

教員志望者のキャリアサポート体制の充実をはかるという目標に向けて、教職支援センターとも連携を取りながら、行動計画の①②③のすべてが実施され、効果を上げている。途中で教職以外の道を選択した学生へのキャリアサポートは引き続き課題として残っているが、さらなるサポート体制の充実に向けて、取り組みを続けていただきたい。



<自己評定> B	<委員会評定> B
<b>1. 【2016 年度の目標等】</b>	
[目標]	
教職以外の進路を希望する学生に対するキャリアサポート体制の充実をはかる。	
[達成基準]	
行動計画①②の終了をもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
<p>①心理学コースの学生を対象とした進路・就職希望調査、支援内容に関するニーズ調査を行い、キャリアサポートに活かす。</p> <p>②キャリアセンターと連携して、教職以外の進路を希望する学生のキャリアサポートを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアセンターからの情報を、ゼミごとに確実に伝える。</li> <li>・キャリアセンターからの情報にそって、学生と面談を行う。</li> <li>・面談で得た情報を、キャリアセンターに報告する。</li> <li>・学科会議で、学生の情報を共有する。</li> </ul>	
<b>2. 【2016 年度の達成状況報告】</b>	
<p>①は、2014 年度に実施した「教育・心理学科心理学コース学生の進路等に関するニーズ調査」は、本年度も実施しなかった。来年度への課題としたい。</p> <p>②は、前年度に引き続き、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習 I において「大学生基礎学力調査」を全員が受験した。</li> <li>・キャリアセンターの説明会・受験講習などの情報を、演習 I～IVの授業時に逐次伝達する。</li> <li>・キャリアセンターからの情報に基づき、個人面談を実施したゼミもあった。</li> </ul>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
②について、キャリアセンターからの連絡を、演習 I～IVの授業時に逐次紹介し、説明会などに積極的に参加するように促した結果、キャリアセンターの催しに学生が参加するようになってきた。	
[改善すべき事項]	
教員養成を主とする学科であるため、教職をめざす学生への対応に比べ、教職をめざさない学生への対応が不十分である。ゼミの教員が個別対応するだけでなく、学科としての取り組みが必要になる。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
特になし	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>

教職志望者へのキャリアサポートは学科全体の取り組みとして行われているが、教職以外の進路を希望する学生へのキャリアサポートについては、そのような体制がまだ整っていない。これは数年前からの課題である。ただ、演習Ⅰで全員に大学基礎学力調査を受験させたり、キャリアセンターと連携して指導を行っている点は評価できる。